



©Yuki Asada

母の手が編む誇り

シャトルと呼ばれる糸巻きを使って糸を組み、繊細な模様を織り上げるタッティング・レースの文化は、植民地時代に英国からミャンマーに持ち込まれた。今でも北部の一部地域では、女性たちが参拝用のショールなどを何カ月もかけて編み上げる。

山本久美子さんは女性たちの高い技術と造形の美しさにほれ込み、ミャンマー雑貨店のdacco.と共同で販売を開始。「伝統的な手仕事で作られた民芸品や織物は質が良いのですが、職人の地位や所得が高い技術に釣り合うものになっていないのです」と話すのは和田直子さん。ミャンマー各地の民芸品を流通させたいという思いから、2010年にdacco.を立ち上げた。

レースのアクセサリーを作っているのは、ミャンマー北部シャン州のモゴックとい

う町からヤンゴンに出てきた女性。レース編みは母から習ったという。彼女自身も娘に編み方を教え、今は親子3代でアクセサリー作りを手掛けている。

「商品の作り手が、職人として自信と誇りを持って仕事に取り組み、高い技術にふさわしい収入を得られる環境づくりを目指しています。職人たちが適切な報酬を得ることで、作品が市場に流通し、技術が受け継がれていくようにしたいのです」と語る和田さん。dacco.では、タッティング・レースの他にも、少数民族の織物で作ったポーチやクッションカバーなどの日用品、さまざまな素材の編み籠、南洋真珠や白蝶貝でできたアクセサリーなど、ミャンマーの文化を大切にしたいオリジナル商品を展開し、伝統技術の継承を支えている。



一つ一つ手作業で作られるアクセサリー。この技術が受け継がれていくために、職人の収入向上は不可欠だ

★ミャンマー産レースのピアスを5人にプレゼント!
→詳細は38ページへ

★dacco.で扱うタッティング・レースアクセサリーはHladee(ラーデー)のウェブサイトからも購入できます。<http://hladee.ocnk.net/>

